大学出版

16号
'92冬

大学と社会を結ぶ
知のネットワーク

大学出版部協会

Association
of
Japanese University
Presses

北海道大学図書刊行会
Hokkaido University Press

聖学院大学出版会
Seigakuin University Press

慶應通信
Keio Tsushin Co., Ltd.

産能大学出版部
The SANNO Institute of Management

玉川大学出版部
Tamagawa University Press

中央大学出版部
Chuo University Press

東海大学出版会
Tokai University Press

東京大学出版会
University of Tokyo Press

東京電機大学出版局
Tokyo Denki University Press

東京農業大学出版会
Tokyo University of Agriculture Press

東京理科大学出版会
Science University of Tokyo Press

法政大学出版局
Hosei University Press

放送大学教育振興会
The Society for the Promotion of
the University of the Air

明星大学出版部
Meisei University Press

早稲田大学出版部
Waseda University Press

名古屋大学出版会
The University of Nagoya Press

京都大学学術出版会
Kyoto University Press

大阪経済法科大学出版部
Osaka University of Economics and Law Press

関西大学出版部
Kansai University Press

九州大学出版会
Kyushu University Press

大学出版
16号

Winter・1992

大学出版部いま模索の時期――幹事長就任にあたって――山下　正　1
読書の周辺　本の思い出――今尾　哲也　3
読書の周辺　EC統合のなかのエリートと大衆――梶田　孝道　7
――ふたつのフランス、ふたつのヨーロッパ――
一九九二年度夏期研修会の報告――関野　利之　12
大学出版部ニュース――14
新刊案内'92・8～11――19
製作の現場から――表3

大学出版部協会マーク・デザイン　道吉　剛

本小冊子中の表示価格は、税込みです。

大学出版部いま模索の時期

――幹事長就任にあたって――

山下　正
（東京大学出版会専務理事）

斎藤至弘幹事長の逝去という不測の事態に直面し、大学出版部協会は七月二十三日、定例幹事会を開催、新幹事長に小生を選出した。第六代目ということになる。とても幹事長の柄ではないのだが、これも運命のいたずらか、時代の流れか、と割り切って引き受けることにした。

大学出版部協会は来年創立三十周年を迎えるが、大きな転換点にさしかかっているのではないか。大学そのものの大きな変貌のなかで、われわれの活動も変革を迫られているのではないか。これまでの活動の延長線上に新たな可能性が見出せるのか。新しい模索の段階を迎えている。

＊

今日、大学と大学経営は「冬の時代」を迎えているといわれる。

一九九二年の十八歳人口（二百五万人）をピークに、以後急激に減少、二〇〇〇年には十八歳人口は百五十一万人と予測され、大学への入学者数の激減は明らかである。一方、これまでに大学の数は大幅に増加してきている。現在、四年制大学は五百二十三校（うち私立三百八十四）で、一九五五年の二百二十八校の約二・三倍といわれる。これに短期大学五百九十一校（私立四百九十九）が加わる。このような状況のなかで、とくに私立大学の場合、大学としてどう生き残るのかが重要な課題となってくる。サバイバルをかけた競争時代への突入が必至となった。

それだけではない。大学審議会（一九八七年十月発足）を中心に、「大学改革」が着々と進められており、社会の「情報化・国際化・成熟化・高齢化の進展」に対応した新しい「大学づくり」構想が具体化してきている。大学院の「改革」をめざす「大学院重点化構想」、大学の個性化・多様化を図るための大学設置基準の見直し、大学の自己評価システムの導入等がそれで、大学審議会の一九九一年二月答申にそって大学改革が急ピッチで進んできている。例えば、「一般教育と専門教育の区分の廃止」に関しては、神戸大学の教養部廃止にともなう国際文化学部の新設、京都大学の総合人間学部の設置などその典型といえよう。

いま、大学は変容を迫られているのである。今後、大学はどうなっていくのだろうか。研究と教育はどう変化するのだろうか。このような大学の変化に大学出版部はどう対

応できるのだろうか。大学における出版部の存在そのものが問われているのだ。

＊

となると、「大学出版部」とは何か、について言及せざるをえないだろう。当然のことながら、大学出版部は大学との関係を離れては存在しえない。勝手に「大学出版部」を設立することはできないのである。大学出版部協会会則にあるとおり、「大学に附属する出版部及びこれに準ずる学術出版団体であることを当該大学が承認したもの」でないかぎり大学出版部協会への加盟も不可能である。

したがって、大学自体が出版部についてどういう方針をもっているのか、大学のなかにどう位置づけるかによって、当該大学出版部の活動のスタンスが違ってくることになる。それは現在の大学出版部協会加盟出版部の組織形態の違いによっても推測できる。すなわち、現在の加盟二十校は①学校法人、②財団法人、③株式会社、のいずれかに属する。①は大学の事業遂行の一部局として位置づけられるが、ⓐ収益事業優先か、ⓑ研究・教育の発表機関としての機能優先か、に分けられる（大学依存型）。②は組織的経営的には大学とは独立。理事会の構成など大学と密接な関連をもつ（独立採算型）。③は大学の事業遂行の役割を担っているが、出版活動で利益をめざす（利益志向型）。

これらは必ずしも截然と区分できない側面をもっているが、要は大学が当該大学出版部に何を期待しようとしているのかによって、出版部のあり方が左右されるということになる。大学間競争が一層進むなかで、大学は出版部のもつ役割と機能を大学経営にどうリンクさせるのか。また、出版部はこれにいかに積極的に応えられるのかがこそ問われているといえよう。

＊

大学出版部の存在証明は「出版という仕事を通じて大学の機能に参加すること」である。すなわち「研究成果の発表としての学術書の刊行、効果的な教育を授けるすぐれた教科書の出版、および大学における研究成果の社会への普及をはかる啓蒙書・教養書の刊行、これらが大学出版部に課された基本的任務である」（大学出版部協会設立の趣旨）といえる。

基本的任務はともかく、具体的な出版活動は大いに変わるべきではないか。大学をとりまく大きな状況変化のなかで、研究者の問題意識と関心、学生の知的関心・ライフスタイルも様変わりといっていい。教科書はもちろんのこと、学術書や教養書についても、大学出版部としてどのような「本づくり」をめざすのかが再検討されるべきだろう。

読書の周辺

本の思い出

今尾哲也
（玉川大学文学部教授）

川本茂雄という先生がいた。名著『文の構造』を残して逝った、高名なフランス語学者である。

彼には独特の読書観があった。

ああ、そのことなら、だれそれの『何々』という本のこれこれのページに、こう書いてあります。

「読んだ本に当り直さずとも、どのページに何が書いてあるということを立ち所に指摘できるようでなければ、読書したとはいえない」というのである。「一度読んだら、正確な内容と、それが出ているページまで記憶してしまうのが読書に外ならない」というのである。

一読即暗記。暗記即読書。

恐ろしい人がいたものだ。頭脳の構造が違うのである。事実、川本さんの後頭部は張り出すように大きかった。そして、分厚い眼鏡の奥で目をしばたたせながら、『文の構造』を手にして教壇に立っていた。昭和三十一年ごろのことである。あの大きな頭に、読書の記憶がいっぱい詰まっているらしい。何か不思議な、得体の知れぬ宇宙人を眺めるような気持ちで、私は講義する川本さんの顔を見詰めていた。とてもじゃないが、記憶力の悪い私に、そんな〈読書〉は出来っこない。

無理に暗記しようなどという不逞な料簡を起さず、自然と記憶に残るものがあればそれで良い。そう思って私は本を読んでいる。

それにしても、ここ数年、読書らしい読書をしていない。この十一月、玉川大学出版部から上梓された拙著『役者論語　評註』を書き上げ、校了するまでに四年の歳月を費やし、その間、目にした本といえば執筆の参考にする史・資料や特定の専門書ばかり。せいぜい、雑誌を斜読みするくらいが関の山という日々が、永らく続いた。

＊

落ち着いて読書する機会がなかなか得られないから、それなら本も買わないかというとそうではない。本屋の棚を覗く。出版ニュースを読む。古書展の目録を眺める。そして、今は読む折が得られなくとも、その内に役立つだろうと思われる本をせっせと買い求めている。いや、買い溜めているといった方が正確かも知れない。典型的な〈積ん読〉の姿である。

ことに、週に一度神保町へ出掛ける仕事があって、わずかな時間ではあるけれど、相も変らず古書店巡りを楽しんでいる。私の専門は歌舞伎の演技論や役者論だから、最初に目が向くのは、いつも役者の芸談・伝記の類である。

めぼしいものには大概目を通した。だが、まだまだ私の知らぬ本があるに違いない。ごく限られた範囲の専門書にさえ、名も知らなければ、お目にかかったこともないという未知の本があるものだ。数年前、本郷の文生書院の目録で見付けた『各座俳優実録』二冊がそうである。

それは、鹿々山人こと山田伊之助の編にかかるもので、明治十五年の二月、三月に刊行。第一号には「市川團十郎之傳・尾上菊五郎之傳」が、第二号には「市川團十郎之続・岩井半四郎之傳」が掲載されている。第一号の序に、「陸続編次仕つれば観劇家の四方の諸君御購求くださるべし」とあり、また、第二号の裏扉には「第三号　近刻　市川左團次　片岡我童実録」との予告が載っているから、引き続き後編が出版されたものと思われるが、定かでない。

二冊とも、八〇～九〇ページの袖珍本で、表紙には、色褪せてはいるものの、明治に固有の赤い色を地に、『暫』と『助六』の縮尺された二人立の役者絵がそれぞれ刷り込まれている。

それにしても、明治の浮世絵に使われた赤い染料は、どうしてああも毒々しく卑しい色をしているのだろう。保存の良いものだと、一世紀の余を経た今日でも、触れば指が赤く染まるような気がするほどである。あの色を美しいと感じ取っていた明治という時代の美意識が疑われる。あれが文明開化・和魂洋才の色感を反映しているのだとすると、日本の近代化を推進した官員さんや田舎紳士たちの精神が、いかに毒々しく卑しいものであったかと思わずにはいられない。

その官員さんや田舎紳士に取り巻かれて、歌舞伎は近代化して行った。九世市川団十郎や五世尾上菊五郎、初世市川左団次といえば、今日の歌舞伎の基礎を築いた不世出の名優と評価されているが、その名優たちの舞台が、あのような色彩を良しとした彼らの感覚に通じ合っていたとすれば、当時の人々が彼らの舞台に求めたもの、それに応えた彼らの芸の在り方そのものが、毒々しさ、卑しさを内に秘めたものであったことになる。

本の装丁には、それが出た当時の精神の在り方や美感が映し出されているのだ。

＊

私が自分から進んで本を買うようになったのは、同志社中学三年のころのことだったと思う。『三木清著作集』が売り出され、書店の前には書に飢えた人々の長蛇の列が出来たなどという情報が新聞を賑わわしていた。ドラクエに群がる人々の行列に似ているかも知れない。もっとも、ドラクエの場合は余るほど生産すれば簡単に解決する問題だ

ろうが、『三木清著作集』の場合は、紙不足という社会的条件があって、購買者の要求を満たし得なかったのだ。発行元の岩波書店では、第一回配本以来、次回のための購入券を奥付に添付していた。ところが、粗雑な仙花紙であるにもかかわらず、紙が逼迫して、発行部数を確保することができなくなり、『第四巻』には、「その後用紙に関する事情に変化を来たし、今後は一定の部数を持続し得る見とほしが困難になりましたので、甚だ不本意ながら今回以後購入券の添付を打切らざるを得ないことになりました。事情御賢察の上あしからず御諒解を賜りたいと存じます」との「謹告」を付さなければならなかった。

何がきっかけで本を買い始めたのか、確と覚えてはいないが、古文や漢文が好きだったから、その種の注釈書を求めて歩いたのが、そもそもの始まりだったと記憶する。教科書に『万葉』の歌が出ていて、書店で見付けた古典文庫の第一冊『西本願寺万葉集』を買ったのも記憶に新しい。昭和二十一年の夏のことであった。校門を出て烏丸通りを渡ったところにある本屋の、入って右手の棚にあった。今は直接購読でしか手に入らない古典文庫が、当初は店頭で売られていたのだ。教科書に出てくる漢詩だけでは飽き足らず、『三体詩』の訓点本や『唐詩選』の板本を求めたのも当時のことである。

かれこれ半世紀に及ぶ、私の古書店巡りの習慣もそのころに培われた。折があると、河原町通り、寺町通りの古書店を巡り歩いた。中でも、三条寺町西入ルの毎日新聞京都支局の傍にあった細川開益堂に寄るのが何よりの楽しみだった。

開益堂は、もっぱら江戸時代の古書を扱っていた書肆である。その御主人細川清助さんには、本について、いろいろなことを教わった。書誌的なこと、書物の質の善し悪しや価値。それが私の研究にどれほど役立ってきたことか。学校で教えるはずもないことだから、開益堂は、私にとって、一種の私塾の役を果たしたといい得よう。

「昨年中ニ御買上下されし様ニ記憶する忠臣蔵評判記古今いろは評林天明五年版の下を入手しました先きニ上巻を御買下され是れを併而揃ふと存じ申上ます……御外出の砌り御立寄り下さい」という、昭和二十八年一月二十日付の細川さんの葉書を、今、懐かしく読み返している。

勤めていた毎日新聞社を辞めて、私が東京に戻ってきたのが昭和二十九年。細川さんは、その後も欠かさず年賀状をくれたし、私もまた、京都へ行ったときには必ず開益堂に顔を出した。細川さんは四十一年一月八日に物故されたが、未亡人のなみさんが店を開けて、御主人が在世中に仕入れた本を売っていた。その年の夏、私は『近松論集　第四集』に「ある古書屋の思い出」という一文を草し、暮に持参して霊前に供えた。

私が最後に開益堂を訪れたのは昭和四十八年の年末。もう本はあらかた無くなって、がらんとした店の一隅に、床

本がまとめて置かれていたのを覚えている。なみさんも翌年に亡くなり、店は畳まれてしまった。

葉書にあった『古今いろは評林』をはじめ、私の書庫に収められている劇書、役者評判記、丸本、絵入根本、洒落本の大部分が、細川さんの店で求めたものである。

東京でもっぱら通い続けているのは、神田の豊田書房である。もとは古賀書店の名で、演劇と音楽の本を専門に扱っていたのだが、後に、音楽書の古賀書店と演劇書の豊田書房と、店を二つに分けて数多くの良書を集めている。

八世坂東三津五郎の没後、四十九日にもならない内に、未亡人がその蔵書を売り払ってしまった。幸い、三世三津五郎を中心に集められた貴重な浮世絵は、生前、国立劇場に寄付されていて難を免れたが、読書家であった三津五郎が、赤坂の家の、稽古場の舞台の後ろに作らせた書棚の本は一冊残らず消えてしまった。三津五郎と親交のあった弘文荘の反町氏が引き取ったとの噂を耳にしたが、真偽のほどは明らかでない。しかし、弘文荘が直接目録に扱う類のものはなかったから、市に出されたのだと思う。それが豊田の店頭に現れた。

三津五郎の古い蔵書には、洒落た書票が貼ってあった。武者小路実篤がかぼちゃの絵に「簑助の本」と書いた三色刷りの、縦横二寸ばかりの四角い大振な書票である。

その書票を貼った本に巡り合ったときの喜び。しかも、中に『拳の打振り』があるではないか。かつて三津五郎が『四谷怪談』の直助を務めたとき、薬の売り声が藤八拳に由来すると知って読んでいた、思い出深い本である。もちろん飛び付くようにして買い求めた。

＊

古書店といえば、かつて私は、古書店から本を出したことがある。飛鳥書房刊『ほかひびとの末裔』がそれである。

西巣鴨にある明善堂の、今は亡き店主畑平誠さんが、古書販売の傍ら、良心的な学者の業績を世に送り出すことに熱意を燃やしていた。古面の研究で知られる昭和女子大の後藤淑さんが、処女論集『中世的芸能の展開』を出したのも明善堂からであった。

その明善堂主に、以前、『歌舞伎座談批評』というパンフレットの出版の面倒を見てもらったのが縁で、彼に私淑していた飛鳥書房の竹岡昭氏を知った。畑平さんの影響を受けたのだと思うが、竹岡氏が芸能関係書籍の出版を志した。昭和四十八年のことである。その最初の試みとして、服部幸雄と諏訪春雄と私の本を出すことになった。翌年の二月に服部の『歌舞伎の原像』、次いで拙著、そして九月には諏訪の『歌舞伎史の画証的研究』が相次いで上梓された。

だが、竹岡氏は、そのあと早稲田大学演劇博物館編『演劇資料選書』として二種の影印本を出したきり、出版事業から手を引いてしまった。私たちの本の売れ行きが思わしくなく、嫌気がさしてしまったのであろう。

読書の周辺

EC統合のなかのエリートと大衆

――ふたつのフランス、ふたつのヨーロッパ――

梶田孝道
（津田塾大学教授）

本年九月二〇日にフランスで、ECの通貨統合・政治統合をその主たる内容とする欧州連合条約（マーストリヒト条約）の批准の是非を問う国民投票が実施された。条約が否決された場合には、ECの統合は数十年にわたって低迷を余儀なくされるともいわれ、その結果が注目されていたが、結果的には、賛成五一・〇五％、反対四八・九五％と、わずかながら賛成派が反対派を上回った。五〇人のうち一人が意見を変えれば結果は逆転するという、まことにきわどい批准賛成派の勝利であった。当初、条約の批准作業は比較的スムーズに進むものとみられていたが、一九九二年春に実施されたデンマークの国民投票において、反対派がわずかながら賛成派を上回り、欧州連合の前途があやしくなってきた。フランスのミッテラン大統領は、こうした不安材料を払拭すべく、条約の賛否を国民投票で問うという途を選択したわけである。

ところが、この夏から秋にかけて、ドイツの高金利によるドイツ・マルク高の進行、ユーゴスラビア内戦の泥沼化とECによる調停の失敗、フランス国内における農民の抗議行動、そして一部の政治指導者たちによる条約反対のキャンペーンの浸透、さらには、汚職等の不祥事が続く社会党とミッテランへの批判が重なり、夏休みあけに行われた一連の世論調査では、一時、条約への反対が賛成を上回った。二〇日の国民投票の結果は、かろうじて賛成派が反対派を上回ったものの、フランスでは、条約の是非をめぐる世論がほぼ二分されていることが明らかとなった。論争の内容は別として、ドレフュース事件以来の「二つのフランス」が出現する結果となった。

ここで注目したいのは、条約への賛否が、左翼―右翼、保守―革新といった従来の対立軸によっては、ほとんど説明できないという点である。条約への賛否を分かつものとしては、さまざまな対立軸が考えられよう。ここでは、「エリート　対　大衆」という社会学的な対立軸が、予想以上に重要性をもっているという点を強調してみたい。

一九九一年末、一二カ国の代表者の間でマーストリヒト条約が合意された時、イギリスは別として、条約それ自体に真っ向から反対する国は存在しなかった。各国の国会で条約の批准がなされる場合、ほとんどの国において、圧倒的多数の賛成で承認されている。どの国においても、与党

にしろ野党にしろ、また右派にしろ左派にしろ、ほとんどの大政党が条約に賛成している。それゆえ、この条約は、各国でスムーズに批准されると思われていた。

ＥＣ北東部の小国デンマークの場合も例外ではなく、国会レベルでは問題なく賛成派が多かった。にもかかわらず、いざ国民投票を行ってみると、予想に反して、僅差ながら批准反対派が勝利し、国会のレベルと国民のレベルとで意見の分布が著しく隔たっていることが明らかとなった。フランスの場合も、上下両院合同会においては、賛成五九二、反対七三というように賛成票が圧倒的に多かった。ところが、夏から秋にかけての世論調査では、一時、反対派が賛成派を上回り、各方面のエリートたちをあわてさせた。フランスでも、国会のレベルと国民全体のレベルの間に相当の開きがあることが明確となった。

ここでのキーワードは「国民投票」である。西欧諸国では、大統領を選出したり、重要な案件の成否を決する際に、しばしば「国民投票（レファレンダム）」が採用される。「国民投票」は、一面では民主的な側面を強くもつが、他面では、後述するように、議論それ自体が思いがけない方向へ拡大していくことが少なくない。それゆえ、見方によっては、かなり危険な性格をもっているともいえる。

一九九二年ＥＣ統合は、「市場統合」ということからもわかるように、経済の領域を中心になされてきた。それゆえＥＣ統合は、日米に対抗するためヨーロッパ諸国が結束するという性格が強い。こうした市場統合の延長線上に、通貨統合が構想されている。従って、ＥＣ統合の主たる担い手は、経済人であり、テクノクラートであり、大会社であるともいえる。また、こうした新しい状況のなかで活躍するのは、高学歴者であり、管理職以上の人々であり、若い世代である。今日、ＥＣ各国を股にかけ、いくつもの言語を駆使して活躍する「ヨーロッパ人」が大量に輩出されつつある。これらの人々にとって、「ヨーロッパ人」であると同時に「フランス人」であることには、何の矛盾もない。今回の国民投票においても、賛成票が多かったのは、アルザス等の、ＥＣ統合から利益を得る可能性の高い国境隣接地域と、上記の人々が集中するパリやリヨンといった大都市地域であった。これらの地域は、伝統的に保守勢力の強いところであるが、にもかかわらずミッテランの提起した国民投票に賛成票を投じたのである。

これに対して、ＥＣ統合から取り残される人々は誰か。それは、ＥＣ統合によって、従来からの国家による保護政策を受けにくくなる農民であり、中小企業関係者である。フランスでは、農民、労働者、旧中間層、さらには失業者において条約への反対意見が強い。ＥＣ統合、とりわけ市場統合は、国家間の垣根を取り払うと同時に、人々を自由で情け容赦のない競争関係のなかに放り出すという側面をもっている。多くの事柄が自由になるかわりに、失敗も各人の責任とみなされる。しかし、現実には、さまざまな

理由によって社会経済的立場の弱い人々が少なくない。彼らにとって自分たちを庇護してくれる唯一の存在は、ECではなく国家なのである。今回の国民投票において、反対票が多かったのは、農村地域であり、さらには北部フランス等の衰退産業を多くかかえ失業者の集中している地域であった。南部のラングドックや北部のノール＝パ＝ド＝カレは、伝統的に社会党支持者の多いところであるが、今回の国民投票では、反対票の多い地域となってしまった

フランスの労働者や農民、低学歴層にとって、EC統合は直接関係する事柄とは必ずしもいえない。彼らの多くは、日常生活のなかでナショナルな価値観に拘束されており、また外国語が理解できない。それゆえ、EC統合に対しては概して無関心であり、EC統合は、いわば雲の上の出来事でしかないのである。フランスの山深い山村に住む農民にとって、EC統合は、どの程度意味があることなのだろうか。欧州議会選挙が既に三回実施され、概して投票率は低かったが、とりわけ関心の低かったのが上記の人々の場合である。彼らは「フランス人」であっても、現代的な意味で「ヨーロッパ人」になることは容易ではない。

しかし、近年では、こうした人々も、EC統合に無関心ではいられなくなってきた。EC統合は、既に相当程度進行しており、企業の合併・吸収、農民への保護政策の見直し、安い農産物の流入、食品への規制にみられるように、ECの影響が次第に各国に浸透してきている。

この夏のフランスでは、農民たちの実力行使をともなったデモや集会、さらには主要な幹線道路の実力閉鎖の動きがみられた。EC統合の進行によって、これまでのような農業への保護措置が困難となることへの農民たちの反発であった。ノルマンディー地方のカマンベールや、山羊の乳でつくったシェーブルという生チーズは、フランスの個性そのものといってよい。ところが、これらがECの衛生基準に合致しないとして、EC委員会から横やりが入った。最終的には、これらのチーズの輸出は従来通り認められたが、このような事件によって、フランスの農民や国民は、EC統合が「フランスらしさ」を消し去る危険性をもつことを本能的に感じたのである。EC統合の浸透によって、自己の社会経済的基盤を脅かされ、「フランスらしさ」が失われつつあると感じる人々が増加してきているのである。

また、EC統合は、経済・金融面、税制面、科学技術面、運輸・通信面等において各国間の複雑な調整作業を必要としており、一般に、EC統合は、大衆にとって容易には理解しにくい側面をもっている。大衆は、EC統合の専門的・技術的な問題にはあまり関心をもたず、したがって、各国の指導者が国民に対してEC統合を説明する場合も、大衆受けしない専門的・技術的な事柄は、話題としては避けられることが多い。従って、国民に対する説明も間接的・迂回的なものとなり、また、「上から」説明するとい

う形をとりがちであり、結果的には、国民に対してEC統合の必要性を十分説明するに至っていない。

こうしたなかで、フランス国内では、EC統合はブリュッセルのEC官僚への権限の集中を招き、国家主権の放棄につながるという主張が急速に広まってきた。EC統合が、民主主義を置き去りにした形で進行しているという「民主主義の赤字」論も、依然として根強い。こうした点から、しばしばテクノクラートに対抗する形での「ポピュリズム」の主張が展開される。フランスでの条約反対派は、他方では、EC統合によってフランスの固有の文化が失われるとして、ナショナル・アイデンティティの危機に訴えかけた。保守的なフランスにせよ、共和制のフランスにせよ、フランスそのものに訴えかけたのである。

反対派は、主として、この「ポピュリズム」と「ナショナリズム」という二つの視角から自らの主張を展開した。かれらの主張のなかには、ブリュッセルのEC官僚の支配に抗してフランス・ナショナリズムを防衛し、エリート中心に進められるEC統合から取り残された大衆に、直接訴えかけるという姿勢が明確に認められる。ここでは、「エリート 対 大衆」、「ヨーロッパ主義 対 ナショナリズム」という二つの対立軸が重なり合っており、反対派は、「ポピュリズム」と「ナショナリズム」を結合することによって、大衆の支持を獲得するのに成功したのである。

ミッテラン大統領が国民投票を実施することを決めた六月には、批准賛成派が多数を占めており、しかも、バカンスのシーズンに入るということもあって、ほとんどの政治家は政治活動を事実上停止した。これに対して、セガン、パスクア、そしてシュヴェーヌマンといった与野党の中堅指導者たちは、バカンス中も全国をまわり、「辻説法」によって条約反対を訴えた。行く先々には、バカンスとは余り縁のない多くの大衆がいた。これらの指導者たちの主張の内容とは別に、その庶民的な姿勢に、すなわち「ポピュリズム」に、共感をいだいた国民も多かったのではないかと思われる。

フランスのテレビのインタビューに答える、マルセイユの魚市場の年輩の一女性の発言が妙に印象的であった。彼女は、「マーストリヒト条約のことは、正直いってよくわからない。でも、自分は今の生活には満足している。今の生活がEC統合によって変わってほしくない。だから『ノン』に投票する」。こうして、「国民的行事」といわれるバカンスが終わる八月終わり頃には、賛成と反対とが拮抗するまでになっていたのである。最終的には、ミッテラン自身が登場し、選挙へと突入した。その結果が、批准反対派の予想外の善戦であり、賛成派の薄氷を踏む形での勝利であった。

それゆえ、マーストリヒト条約の批准を、国会での議決によって行うか、それとも「国民投票」によって行うかでは、結果に大きな相違が生じることも容易に理解できよ

う。EC統合は、経済的論理からして不可避な選択という性格が強く、またエリートの間では、統合の必要性は比較的容易に理解される。しかし、この問題が、EC統合の主役では必ずしもなく、またEC統合によって直接的な利益を受けず、場合によっては、EC統合によって自己の社会経済的基盤が危うくなると感じる人々のレベルに降りると、事態をエリートの手で統制することが困難となる。論争は、合理的な説得の問題から、情緒的でアモルフな社会心理をも含んだ対立へと変質していく。

デンマークでは、小国の政治的疎外とさらなる周辺化が危惧された。カトリック国であるアイルランドでは、論争は、経済や通貨の問題とは無縁な妊娠中絶の是非をめぐる問題へと波及した。さらにフランスでは、ナショナル・アイデンティティの危機と反ドイツ感情が高揚した。これらの論点は、経済人や官僚のレベルでの議論とは大きな距離があるものであることに気づくであろう。ことの是非は別として、エリートと大衆とでは、EC統合の受けとめ方が、明らかに異なっているのである。

EC統合が大衆のレベルでも十分な説得力をもつためには、この統合が、マクロ経済レベルだけではなく、日常生活や社会・文化のレベルでも十分議論されることが必要である。EC統合の過程において、民主主義がどのような形で保証されるかが明確に示されなければならない。また、「市民たちのヨーロッパ」あるいは「社会的なヨーロッパ」というスローガンが具体的なものになるためには何が必要かが、真剣に論議されなければならない。さらに、欧州連合によって各国のナショナルな要素や国家主権がどう変化するのか。大衆の日常生活のなかで、「フランスらしさ」は、また「フランス人」であることは、どのように変わるのか、また変わらないのか。各国政府は、これらの点について、条約反対派の主張に共感を示した人々に対して、明確な展望を与えなければならない。今回のフランスの国民投票は、これらの問題を提示したといえる。

現段階では、ECは一二カ国の連合体であって、マーストリヒト条約批准の手続きも、各国でまちまちである。多くの国々は、国会の決議によって批准を済まそうとしているのに対して、デンマーク、フランス等は、「国民投票」という手続きをとり、それによって条約それ自体が葬られそうになった。ヨーロッパの運命がフランスやデンマークの「国民投票」に委ねられることが「民主的」か否かを判断するのは難しい。一部のヨーロッパ主義者は、「レファレンダム」を、一国内ではなく、EC一二カ国全体で行うべきだと主張するかもしれない。その場合には、どのような結果が出るかを予想することは、なかなか興味深い。

一九九二年度 夏期研修会の報告

関野 利之
（玉川大学出版部）

一九九二年度大学出版部協会の夏期研修会は、九月三～五日の三日間、きびしい残暑のなか、千葉県勝浦市の勝浦簡易保険保養センターで開催された。

今回の研修会ホスト校は慶應通信で、山國顯氏ら五名でお世話戴いた。いつもながら幹事ホスト校のご苦労には感謝したい。

研修会は初参加の聖学院大学出版会を含めて五四名、うち初参加者は八名、かなり親密な関係の団体ともいえる。

会は、午後一時三〇分から幹事長の挨拶で始まった。山下正・幹事長は東京大学出版会の専務理事であり、急逝した前の幹事長・斎藤至弘氏の後を受けて幹事会の互選により選出された。全国規模の大学出版部協会の会合には初めてのお目見えとなる。また副幹事長には私、玉川大学出版部の関野利之部長が指名され受諾したことも披露する。

ここでは、以下、全体集会でのセミナー、分科会と二つの流れに整理してみよう。

Ⅰ 全体集会でのセミナー

第一部では、日本書籍出版協会で作成した「これから出る本」創刊十五周年記念論文集『出版界への提言』をテキストに討論集会を行った。コメンテーターとして中央大学の永井隆三郎、東海大学の小野朋昭、東京大学の佐藤修、東京電機大学の岩下行徳、法政大学の鎌田靖彦氏らの発言を手始めに出版をめぐるさまざまな問題についての意見交換が行われた。

第二部では、ケーススタディとして名古屋大学出版会の伊藤八郎常務理事による「名古屋大学出版会十周年」特別報告が行われた。準備期から「出版へのエネルギーの蓄積」「人とタイミング」そして草創期の課題としての「財団法人設立への意欲と山積する課題」への挑戦と克服。成長期の概略として「出版社は企画次第、が出版社は編集だけではない」のポイントを指摘し、次の十年を目指してのポイントとして、発展途上出版会としての自覚、マクロとミクロの計画の的確なバランス、強力なリーダーシップと職員のパワーアップが課題であると結んだ。その後、会員たちの質問攻めにも果敢に応対した。

Ⅱ 分科会

(1) 編集部会

月例の部会は、在京の大学中心になりがちなので、名古屋大学・大阪経済法科大学・関西大学の加わった部会は活気を帯びた。議題は、翌年の「協会三十周年」が中心になった。まず『大学出版部協会三十年の歩

み』の制作打合せが行われ、内容の骨格として『二十五年の歩み』の増補版的な形にすることが確認された。「ユニバーシティ・プレス小史」「各大学出版部紹介」「マスコミのみた大学出版部」「会員出版部分野別刊行実績」そして協会の三十年を回顧できるような名簿をという要望から「協会の歴代役員名簿」「各出版部の一冊の本」というような内容が確認された。

また来年の協会ブックフェアでの『大学出版部協会総合図書目録』の制作には編集部会としては営業部会の提案に柔軟に対応することを確認した。

(2) 営業部会　月例の部会に、北海道大学・大阪経済法科大学・九州大学の出版会が加わった。議題は協会広報誌『大学出版』の有効活用の方法論と年四回発行の定期化が論議された。「九二年東京国際ブックフェア」には協会としての参加として、スペース二ブースを確保し、二年間の新刊展示、日本生命財団出版助成図書展示・各出版部二点陳列をする。また三十周年記念事業としてブックフェアを行う。出版目録・ポスターの作成、売上目標の設定なども討議した。これは全国各出版部の学内フェアだけでなく加盟校以外の学内店舗でも積極的に展開し、あわせて大学図書館への納本事業をも推進することを確認した。

(3) 刊行助成部会　昨年度から定例の部会として発足した。日本生命財団の出版助成の実務会合から出版助成財団の名簿作成までに活動範囲を拡大した。日本の大学における刊行助成の実態を現状把握するため、数年来の課題であった「私立大学における学術研究成果の刊行助成制度一覧　一九九二年度版」が中間報告の形ではあったが、提出された。名称、対象、予算額、分野内容、助成方式、算定基準、審査方法、刊行条件、既刊書などの明細が列挙され、さながら日本の大学の学術レベルをかいまみるようなスリリングな調査報告書でもあった。

(4) 幹事会　この秋の主要行事、日本・韓国大学出版部セミナー（韓国・釜山）への参加大学の候補について、東京国際ブックフェアを機に来日する中国大学出版社協会訪日団の応対について、また日本書籍出版協会委員会候補者について協議した。

中国大学出版社の訪日団は、国家教育委員会の高炳章・協会理事長を初め、顔なじみの北京大学出版社の麻子英社長ら十名である。二週間の滞在中、各大学出版部が東京・名古屋・京都・大阪と応対することになった。

その後の全体集会では、各分科会の報告がなされ、それぞれ質疑応答、確認、決定が行われた。また協会キャッチフレーズが再確認され、「大学と社会を結ぶ　知のネットワーク」（後日、幹事会決定）が今後のイベント、広報活動などに積極的に使われることになる。

最後の総括は、山下幹事長が簡潔に締めくくった。

今回の研修会は、外部講師なしの会員校だけのいわば身内だけで行われたが、それにもかかわらず実りのある会合であった。とくに名古屋大学出版会の伊藤氏の情熱溢れる報告には一同大いに感銘深いものを受け、大学出版部運動の原点を再発見した思いであった。深夜におよぶ第二次会は会員同志いっそうの連帯を深めるものであった。

北海道大学図書刊行会

■北海道大学附属図書館編『明治大正期の北海道――写真と目録』（AB判二分冊・一二三六〇円）は、北海道各地域の開拓の状況から千島列島・樺太・アイヌ民族の記録まで、世界的にも貴重なフォトドキュメントの全貌を明らかにしたものである。興味深い写真の数々は、時代を超えた人間の記録として、大きな感動を与えるであろう。

■北海道の気候はその広大さ故に地域差が著しい。夏の低温、冬のドカ雪・流氷など特異な現象もある。九月新刊の大川　隆著『北海道の動気候』（A5・三五〇二円）は、こうした北海道特有の気候を地域性との関わりまで細かく具体的に解説した本として好評である。道内各地で予報官・気象台長として活躍してきた著者にして初めてまとめ得た労作といえよう。

聖学院大学出版会

▼本年は、ラインホールド・ニーバーの生誕一〇〇年にあたる。ニーバーは、ジョージ・ケナン、アーサー・シュレジンジャーなど、アメリカの政治学者の父と呼ばれ、元大統領ジミー・カーターは、彼の著作を自らの「政治的バイブル」と語ったほどに影響を与えてきた政治倫理学者である。このニーバーの主著のひとつ『光の子と闇の子――デモクラシーの批判と擁護』（武田清子訳）の改訂新版を出版準備中である。権力が対立し、政治と経済が相剋する現実にあって、正義と自由を確立するためには、いかなる指導原理が存在するのか。人間の悪の問題の把握において深い洞察を欠いているマルクス主義、デモクラシー思想の楽観主義を批判し、キリスト教思想に基づくデモクラシー原理の正当性を弁護する。

慶應通信

◆新刊紹介

▼池井優著『三訂・日本外交史概説』「日本外交史を学ぶ姿勢として大切なのは、日本を囲む国際環境を為政者がどう受けとめ政策に移行していったかを探ることである」と著者は述べる。本書は日本外交の転換点に重点を置いて記述された通史で、今回、一九九二年まで内容が増補された。外交官試験の参考書としても好適であろうと思う。

▼山岸健著『風景的世界の探究―都市・文化・人間・日常生活・社会学』風景と人間に注目した著者の優れた社会学的論稿を集録した。「人びとの日常的体験をよりどころとして、人生の旅路、人間存在と風景の諸様相、〈日常生活の世界〉を照らし出す。私たちの身辺から、人びとが生きている世界と社会学の〈地平〉が展望される」（著者）

産能大学出版部

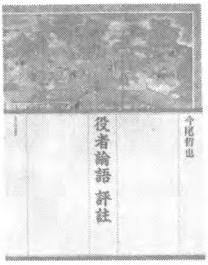
米・欧・日の戦略経営の第一人者が執筆した大冊『戦略経営21世紀へのダイナミクス』（H・アンゾフ／D・ハッセイ／中村元一共著　四六判　三二〇〇円）が出版された。本書は21世紀へ向けての日本企業の戦略経営像に関する基本的な視座と具体的なガイドラインが提供され、グローバル環境の乱気流を乗り切るための書である。

『イベント戦略入門』（湯澤明著　A5判　二三〇〇円）イベントプロデューサーとして多くのイベントを成功裏に導いてきた著者が、豊富な経験をもとに企画から実行・評価までを具体的に書きあげた画期的な書。

『変革期のクレジット戦略』（岩崎和雄著　四六判　三二〇〇円）業界の抱える多くの矛盾や問題点をズバリ指摘し、業界発展のために提言した警鐘の書。

玉川大学出版部

▼今尾哲也『役者論語　評註』二五七五〇円　元禄歌舞伎の名優、坂田藤十郎、芳沢あやめ等の類を絶する芸談や逸話をとりまとめた歌舞伎役者の聖典を忠実に翻刻し、詳細な注を付す。歌舞伎草創期における模索の軌跡が如実に浮び上がっている。



▼新堀通也『私語研究序説』三二九六円　分っているが止められない大学生の授業中の私語。日本人の公私感覚や言語行動の文化的・社会的な役割が変容したことを起因とする私語の横行は、たかが私語と片づけられない問題を背景にかかえている。

中央大学出版部

水野朝夫著『日本の失業行動』に労働関係図書優秀賞

本書は、日本労働研究機構（JIL）が読売新聞社の後援で実施している労働関係図書優秀賞の第一五回優秀賞を受賞した。

同賞は労働に関する優秀図書を表彰することによって、労働問題に対する一般の関心を高めるとともに調査研究の発展に資することが目的とされている。

「統計データの解析の手堅さ、失業構造の諸側面への目配りの適正さなど、丹念で地道な分析に高い評価が集まり、受賞のポイントとなった。」（読売新聞）

九月一七日に著者と出版者に対しJIL会長賞と読売新聞賞が授与された。

東海大学出版会

水耕栽培、細胞培養、環境制御など、バイオ技術やコンピュータを導入して効率化をめざす植物工場の多くの実用例を紹介。学会長の高辻正基・東海大教授ら十七人が執筆。「二十一世紀に向けて農業を活性化し、若者たちに魅力あるものに」との願いが込められている（『ハイテク農業ハンドブック―植物工場を中心にして』朝日新聞評）

セネカ『道徳論集』につづいてセネカ『道徳書簡集』が発刊された。「自然研究」とならぶセネカの主要著作のひとつである。セネカ最晩年の作とされ、すべて年下の親友ルキリウス宛てに書かれている。多事多難の生涯にわたって、長年体験し考え続けてきた思想を、平易に簡潔にそれでいて俗には堕さず、学門的色彩も失わずに説いている。本邦初の全訳。（N）

東京大学出版会

折茂肇編集代表『新老年学』（定価二九八七〇円）が刷を重ねている。長寿社会の成熟を願い、第一線一六〇余名の執筆者を擁して、老年医学、基礎生物学、社会老年学を総合して編集されたB5判一二八〇頁の大冊である。

老化とは何か、老年症候群（健忘、排尿障害、骨折、寝たきり……）、老年病各論（循環器、運動器、消化器、呼吸器、感染症、血液疾患、精神医学……）、リハビリ・看護・介護、老年期の社会的・心理的諸問題などを詳細にときあかしていて、老年学の新しい集大成の、いわば百科辞典（エンサイクロペディア）として、医師など専門家の評価も定着しつつあると自負している。

東京電機大学出版局

「情報科学セミナー」も今日出版された『公開鍵暗号系』（アルト・サロマー著、足立暁生訳、四五〇〇円）で9冊となり講座の形が整ってきた。計算機科学の専門書で、小さなマーケットを対象としているが、ネットワークの普及によりデータ保護の必要性が高まっている背景を受けてか、好評である。

暗号というとコンピュータよりスパイ小説を連想する人も多いと思うが、現実には多くの数学者が研究に携わっている。第二次大戦時にドイツのエニグマ暗号を解読したのがチューリングなのは有名な話である。コンピュータ処理能力の向上により従来の暗号が解ける時代に、欧米では公開鍵暗号系の標準化に取組んでいる。データ保護後進国の日本でも、本書の出版が見直しの契機になればと期待する。

東京農業大学出版会

◆東京農業大学日本農業を考える会編『二十一世紀農業への提言―豊かな生活と農林業の創造をめざして―』（A5判、四九一ページ、四千五百円、農林統計協会刊）

本書は、東京農業大学日本農業を考える会が、農大創立百周年を記念して、『わが国の二十一世紀農業のビジョン』として提言したものである。

全体が二部に分かれているが第一部の21世紀農業のビジョンと提言では、国際化と日本の農業、食生活の見直しと食文化の創造、生態系保全型農業のビジョンと創造、農業における技術革新と経営革新の展開、農産物流通の革新と食品産業の展開方向、21世紀の大学における農学研究と教育と云った項目が論じられ、その内容は非常に示唆に富んだものである。

大学出版部ニュース

東京理科大学出版会

月刊誌「SUT」は理大の英文名の頭文字で、中堅諸先生の熱心な編集にかかり、卒業生の業績をも多数紹介し、学生にはその進むべき方向に示唆を与えている。次に全国高校図書館長先生からのご通信を紹介する。「文科系出身者や自然科学に弱い者にとってまことにヒエキするところが多い。女子高生の興味をひくようなたとえば生活とか環境とかに関する特集を組んでほしい。文化祭クラブ活動などで必要な折に活用するケースもあるため、バックナンバーも保管して利用に備えている。なお、担当者の立場から『科学教養雑誌』として続けていただきたい。理科大学全般のことがよくわかる」。できるだけご要望にそえるように考えております。

定価五七〇円
年間五一五〇円

法政大学出版局

▼新刊書の中から

W・シヴェルブシュ　福本義憲訳『図書館炎上』　定価二四七二円

大戦によって二度までも火を放たれたベルギーのルーヴァン大学図書館――その炎上と再建をめぐって、底流をなす文化の葛藤、背景をなす時代の相貌を描き、ミステリーの味わいを持つ歴史ノンフィクション！

ドイツ賠償図書用の蔵書票（本書より）

▼事務所移転のお知らせ

本年11月17日より、事務所を移転致しました。新事務所は地下鉄有楽町線市ケ谷駅5番出口より外堀通りを飯田橋側へ徒歩一分、法政大学92年館（大学院棟）一階です。お立寄り下さい。

放送大学教育振興会

▼一九九三年三月に刊行予定の八十二点の新刊は力作ぞろい。▼『変動する日本社会』は阿部齊教授ほか十一名の執筆陣が、昨今、わが国の社会、経済、政治、法律などの諸分野に生じている変動を明らかにし、二十一世紀の日本社会が直面する課題を探る。▼人類は、発生以来、自然環境に適応し、開発し、拡散して、今や宇宙にまで居住空間を広げようとしている。人類と環境の多様なかかわりの歴史を、世界の諸民族の具体例でとらえ、今後のあり方を考察する『文化と環境』は、国立民族学博物館の石毛直道・小山修三教授ら七名の執筆による。▼『中国の近代と現代』は、十九世紀以降の通史とともに、産業、経済、社会、女性、生活等の諸問題にも目を向け、近現代中国の全体像を明らかにする。

明星大学出版部

出版部は設立以来、明星大学の学問、研究書の刊行と、広く一般の学術文化に出版を通して貢献することを目的として来た。

主な講座は「大学講座」「小学校教職講座」「哲学講座」「図書館学講座」「占領教育文書シリーズ」等であるが、中でも「講義ノート」は刊行点数が76点とテキスト用出版物に次いで出版されている書物である。

この「講義ノート」は、大学の全学科目について作成、学生に携帯させ、授業を円滑に進めることを目的としていることから、装丁も簡易にして学内のみで販売していたが、最近では、『多変量統計解析』『要説社会保障・社会福祉学Ⅱ』にもみられるように他大学でもテキストとして使用されるようになって来た。

大学出版部ニュース

早稲田大学出版部

▼『早稲田文学〈第二次〉復刻版』(全13巻、全巻揃定価六五万円)が完結した。島村抱月時代の「早稲田文学」〈第二次〉(明治39年〜大正7年)全一五七冊の本文・口絵・広告等すべてを復刻。菊判並製。総約四一〇〇〇頁。一年分ずつ布貼特製帙入り。全巻完結に際し付録として小川未明筆「葉書」等の複製、「総目次・解説」他を進呈。三〇〇部限定出版。分売はいたしません。

▼「シリーズ 比較家族」の刊行を開始した。比較家族史学会監修。古代から現代までを視野に入れ、家族のあり方を考える。第1巻『家と家父長制』(定価三六〇〇円)は好評を得ている。

名古屋大学出版会

◆小会創立十周年の記念出版として『カンツォニエーレ』(池田廉訳)を刊行した。発足より一八四点目、十年間の数字としてはささやかなものであろう。ただ幸いにも好評裡に迎えられた本も幾つかあった。そこには、訳者が多年の心血を注がれた『ターヘル・アナトミア』以下の翻訳書が数えられるが、いずれも大部のもので、苦労しながらの散発的な出版であった。これら大型古典の翻訳書系列を発展的に捉え返せないかというのは、ここ数年の課題となっていた。そこで、この十周年を期に「古典翻訳叢書」を設け、その第一号として実現したのが『カン…』である。言うまでもなく、伊国の詩人ペトラルカの傑作詩集で、全訳のなかったのが不思議でさえある。先日、日本翻訳文化賞の受賞が決まった。

京都大学学術出版会

La Révolution française et la Littérature（フランス革命と文学）は、多数の方のご尽力のおかげで、パリ市内の五書店の店頭に並ぶことになった。〝一二カ月長期委託〟である。ル・モンド紙への広告、フランス一八世紀学会の名簿を使ってのDMと、打つべき手はうった。この原稿を書いているいま、その五〇冊は、インド洋からアラビア海へ入った頃だろうか、ともかく、あとは健闘を祈るしかない。

彼らの渡欧は、東南アジア～南アジア地域を右手に見ながらの旅になったが、その地域の国々における宗教活動を人類学的見地から解析する研究書『実践宗教の人類学――上座部仏教の世界――』（田邊繁治編著）を、くしくも近く刊行する予定である。

大阪経済法科大学出版部

◆創立二〇周年記念論文集発刊部会編『経済学の諸課題』『法学の諸課題』『綜合科学の諸課題』各一八五四円。三冊とも本学創立二〇周年記念の論文集（全五冊）。一一月二〇日発刊。『世界経済と日本経済』『東アジアにおける社会と文化』の二冊も近日発刊予定。◆九一年国際学術シンポジウム報告書編集委編『東アジアの社会と経済』「第二集」二五七五円。九一年に本学と北京大学の共催で行われた第二回国際学術シンポジウムの報告集。アジア・太平洋諸国・諸地域の著名な研究者による政治・経済・歴史・文化等多角度からの東アジア研究の成果を集めたもの。八九年版の第一集よりもテーマも絞りこまれ充実した内容となっている。

関西大学出版部

▼丹治昭義著『実在と認識―中観思想研究Ⅱ―』（定価五五〇〇円）空の立場を提唱し、貫き通した般若経・中観思想では、佛陀も空であり、佛陀の教えも空である。この空なる佛陀による空なる説法以外に佛の教え・佛教はない。本書は空が縁起・相互依存であることを佛陀と佛陀の教説にも貫き通した中観派の立場を追究。▼井上宏『大阪の笑い』（定価一三〇〇円）大阪では古くから笑いの芸能が発達し、今日も盛んなのはなぜなのか。人々に楽しみを与え、人間関係を円滑にし、幸せと健康をもたらす笑いの効用とは何なのか。笑いの重要性を説きながら、大阪人の生活態度や価値観と笑いの関係について分析、特に漫才の笑いや吉本新喜劇についての分析・考察はユニーク。〔日本図書館協会選定図書〕

九州大学出版会

▼I・ブラッドリー＆R・L・ミーク『社会のなかの数理―行列とベクトル入門』定価三六〇五円。経済学をはじめ、勢力関係・社会紛争・社会移動・人口問題・親族構造など政治学・社会学・人類学などの話題も幅広く登場。社会科学専攻者で数理的方法に関心のある読者に待望の一冊。▼川口勝之『地球環境システム設計論―クリーンエネルギー利用次期社会の総合システム』定価八〇〇〇円。「環境と生態系と技術の調和」について、問題の提起から解決のための具体的な方法まで、工学の新しい方向を示し、総合的な立場から環境問題に取り組む。▼徳本正彦『北九州市成立過程の研究―合併論・合併運動を中心として』（一九九一年二月刊、定価一〇三〇〇円）第18回「東京市政調査会藤田賞」特別賞受賞。

新刊案内 '92・8〜11

（表示価格は税込みです）

■北海道大学図書刊行会

脳障害者の心理療法　小山　充道　四六三五円

Circadian Clocks from Cell to Human　広重　力・本間　研一編　一二三六〇円

Applied Electromagnetics in Materials and Computational Technology　本間利久・I・セバスチャン・柴田拓二編　一二三六〇円

北海道の動気候　大川　隆　三五〇二円

反芻類家畜の解剖図説　杉村誠・山下忠幸・阿部光雄　四六三五円

北大構内スケッチ　八鍬　利郎　一八五四円

Squalean Phylogeny　白井　滋　八二四〇円

文明の十字路——東欧　北海道大学放送教育委員会編　二〇六〇円

北海道の住まい　北海道大学放送教育委員会編　一八五四円

■聖学院大学出版会

ベリーズ社会と現状　稲葉　安勇　二七〇〇円

戦後貨幣金融史　E・ビクター・モーガン／小竹豊治監訳　三五〇二円

新しい時代の価値観—平和共存への途—　藤川吉美／周　暁燕　一九五七円

日本古代史叢説　村山光一編著　二八〇〇円

窮民救助制度の研究—帝国議会開設以前史—　稲葉光彦　三〇九〇円

三訂日本外交史概説　池井　優　三九一四円

現象学と倫理学〈日本倫理学会論集27〉　日本倫理学会編　三七〇八円

■産能大学出版部

イザという時の身の処し方の心得　斎藤　之幸　一五〇〇円

全改訂・期待される管理者像　R・ブレーク／A・マッケーンス共著　田中敏夫／小見出澄子共訳　三九〇〇円

日本型リゾートの開発戦略　伴　祐爾監修　リゾート開発研究会編著　二〇〇〇円

戦略経営・21世紀へのダイナミクス　H・アンゾフ／D・ハッセイ／中村元一共著　崔　大龍訳　三二〇〇円

人生は愛の演劇　高嶋　弘之　一五〇〇円

節税のための経費対策　東　勇幸　一六〇〇円

小集団活動の新展開　上田　利男　二〇〇〇円

イベント戦略入門　湯澤　明　二三〇〇円

小さな成功が大きな成功を生む　佐伯邦男／国司義彦共著　一五〇〇円

変革期のクレジット戦略　岩崎　和雄　三二〇〇円

社長になれる本　越智　宏倫　一五〇〇円

やる気を起こす奇跡の大逆転教育　森　均　一五〇〇円

研修インストラクター入門　小橋　邦彦　二三〇〇円

若手社員戦力化の要点　守谷　雄司　一六〇〇円

■玉川大学出版部

メタファーと宗教言語　J・M・ソスキース／小松加代子訳　三九一四円
アメリカの大学・ニッポンの大学―TA・シラバス・授業評価―　苅谷　剛彦　二四七二円
価値多様化時代の教育　W・ブレツィンカ／岡田渥美・山﨑高哉監訳　六六九五円
私語研究序説―現代教育への警鐘―　新堀　通也　三二九六円
ペスタロッチー教育学の研究―幼児教育思想の成立―　鈴木由美子　五九七四円
教育・人間性・民主主義―W・クラフキ講演録―　W・クラフキ／小笠原道雄編　四九四四円
役者論語　評註　今尾　哲也　二五七五〇円
教育者のロゴス―教育思想の深みへ―　福井　一光　二八八四円
意味の探求―人生論の哲学入門―　O・ハンフリング／良峯徳和訳　三九一四円

■中央大学出版部

各国仲裁の法とプラクティス　P・バロン他／小島武司編訳　一五四五円
マーケティング通論　及川良治編著　二八八四円
市場調査―理論と実際―　柏木重秋編著　三三九九円
Système juridique feançais　小島武司編　四一二〇円
国際商標法の諸問題　桑田　三郎　四三二六円
アメリカの大司法システム(下)　小島武司他編　一八五四円
イスラーム　法と国家とムスリムの責任　真田　芳憲　二八八四円
高分子の分子量分布に関する統計的性質　斎藤　修　三九一四円

■東海大学出版会

ハイテク農業ハンドブック　日本植物工場学会編　三二九六円
日本の生態学―今西錦司とその周辺　大串　龍一　二五七五円
セネカ道徳書簡集（全）　茂手木　元蔵訳　特価一七五一〇円
日本産カミキリムシ種名リスト・標本ラベル　東海大学出版会編　二〇六〇円
日本語初級Ⅱ　東海大学留学生教育センター編　二九八七円
戦略的マーケティングの管理　原田　一郎　二八八四円
毒蛇の来た道―大規模海水準変動説　星野　通平　一八五四円
カント研究　フィロネンコ／中村博雄訳　六一八〇円
自己組織化とマネジメント　H・ウルリッヒ他／徳安彰訳　三八一一円
理論経済学の歴史　A・E・オット他／井上孝訳　四一二〇円
ロシア・ソビエトにおける日本語研究　アルパートフ／下瀬川・山下・堤共訳　三二九六円
現代の惑星学　小林　長生　二五七五円

■東京大学出版会

新老年学　折茂肇編集代表　二九八七〇円
図解・日本の人類遺跡　日本第四紀学会　小野昭・春成秀爾・小田静夫編　六六九五円
戦後日中・米中関係　緒方貞子著／添谷芳秀訳　二四七二円
レーガン財政の研究　渋谷　博史　四一二〇円
現代大都市のリストラクチャリング　大阪市立大学経済研究所／植田政秀編　四六三五円
主観的犯罪要素の研究　木村　光江　五七六八円
火山灰アトラス　町田洋・新井房夫　五三五六円
日本の活断層図　地図と解説　活断層研究会編　四一二〇円
付加体の地質構造――四万十帯の写真アトラス

平朝彦・Timothy Byrne・芦寿一郎編　一〇三〇〇円
帝国議会貴族院委員会速記録・昭和篇29　国立国会図書館所蔵　一二三六〇円
帝国議会衆議院委員会議録・昭和篇29　国立国会図書館所蔵　一六四八〇円
枢密院会議議事録47・昭和篇5　国立公文書館所蔵　一四四二〇円
現代社会と学校〈学校の再生をめざして3〉　佐伯胖・汐見稔幸・佐藤学編　一八五四円
権威の構築と破壊〈現代宗教学4〉　脇本平也・柳川啓一編　二二六六円
地域と民族〈アジアのなかの日本史4〉　荒野泰典・石井正敏・村井章介編　三七〇八円
生と死〈東京大学公開講座55〉　有馬朗人編集代表　二二六六円
福祉国家財政の国際比較　林健久・加藤榮一　四七三八円
裸子植物の胚発生　杉原　美徳　一〇三〇〇円
発生と誘導現象〈UPバイオロジー91〉　八杉　貞雄　一六四八円
帝国議会貴族院委員会速記録・昭和篇30　国立国会図書館所蔵　一二三六〇円
帝国議会衆議院委員会議録・昭和篇30　国立国会図書館所蔵　一六四八〇円
枢密院会議議事録48・昭和篇6　国立公文書館所蔵　一四四二〇円
大日本史料　第一編之補一　東京大学史料編纂所編　五九七四円
大日本史料　第二編之二十四　東京大学史料編纂所編　五七六八円
大日本史料　第七編之二十六　東京大学史料編纂所編　八八五八円
大日本史料　第八編之三十五　東京大学史料編纂所編　五九七四円
大日本古文書　大徳寺文書別集二　東京大学史料編纂所編　六一八〇円
大日本古文書　東大寺文書之十五　東京大学史料編纂所編　四九四四円
大日本古文書　蜷川家文書之四東京大学史料編纂所編　六三八六円
大日本近世史料　細川家史料十三　東京大学史料編纂所編　七六二二円
大日本近世史料　市中取締類集二十　東京大学史料編纂所編　六三八六円
大日本近世史料　広橋兼胤公武御用日記二　東京大学史料編纂所編　七二一〇円
日本関係海外史料　イエズス会日本書翰集訳文編之一上　東京大学史料編纂所編　六一八〇円
中国——溶変する社会主義大国〈東アジアの国家と社会1〉　天児　慧　二四七二円
台湾——分裂国家と民主化〈東アジアの国家と社会2〉　若林　正丈　二四七二円
仮想の近代——西洋的理性とポストモダン　村上淳一　二六七八円
武士と文士の中世史　五味　文彦　二八八四円
保健・医療・看護調査ハンドブック　東京大学医学部保健社会学教室編　二五七五円
日本の政党政治　一八九〇—一九三七年　川人　貞史　五一五〇円
侵入と伝播の数理生態学〈UPバイオロジー92〉　重定南奈子　一六四八円
Theoretical and Applied Mechanics, Vol. 41　堀素夫・矢川元基編　一八五四〇円
帝国議会貴族院委員会速記録・昭和篇31　国立国会図書館所蔵　一二三六〇円
帝国議会衆議院委員会議録・昭和篇31　国立国会図書館所蔵　一六四八〇円
枢密院会議議事録49・昭和篇7　国立公文書館所蔵　一四四二〇円
祀りへのまなざし〈現代宗教学3〉　脇本平也・柳川啓一編　二二六六円

北朝鮮――社会主義と伝統の共鳴〈東アジアの国家と社会3〉　鐸木　昌之　二四七二円
海上の道〈アジアのなかの日本史3〉　荒野泰典・石井正敏・村井章介編　三七〇八円
経営統計入門――SASによる組織分析　高橋　伸夫　三二九六円
政策革新の政治学　五十嵐武士　三五〇二円
日本の近代と資本主義　中村政則編　五五六二円
福祉国家の政府間関係　社会保障研究所編　四五三二円
異民族へのまなざし　東京大学総合研究資料館編　三九一四円
中国経済論――農工関係の政治経済学　中兼和津次　五七六八円
イー・ゲー・ファルベンの対日戦略　工藤　章　六五九二円
国連体制と自衛権　筒井　若水　三九一四円
日本荘園絵図聚影2　山城　東京大学史料編纂所編　六六九五〇円
帝国議会貴族院委員会速記録・昭和篇32　国立国会図書館所蔵　一二三六〇円
帝国議会衆議院委員会議録・昭和篇32　国立国会図書館所蔵　一六四八〇円
枢密院会議議事録50・昭和篇8　国立公文書館所蔵　一四四二〇円

■東京電機大学出版局
ハードウェアの知識〈オンライン情報処理試験受験教室〉①　針生　時夫　二三六九円
ソフトウェアの知識〈オンライン情報処理試験受験教室〉②　清水　光孝　二二六六円
オンラインシステムの設計能力〈オンライン情報処理試験受験教室〉③　都丸敬介　一九五七円
オンライン情報処理試験全問題解答集〔'92年版〕　三輪　進　二四〇〇円
高周波電磁気学〈理工学講座〉　二五七五円
極限科学のなかの極低温技術〈ハイテク選書ワイド〉　守屋潤一郎　一七五一円
オンラインシステムの関連知識〈オンライン情報処理試験受験教室〉④　大島　章　二五七五円
電波法規〈2陸技1・2総通受験教室〉⑤　幡野憲正　二〇〇〇円
アセンブラ言語CASL　下村奉之・石川亨　二四〇〇円

■東京農業大学出版会
名園の見どころ―増補版3―　河原　武敏著　一八〇〇円

■東京理科大学出版会
■法政大学出版局
バイオエシックス―生体の統御をめぐる考察―　F・ダゴニェ／金森修・松浦俊輔訳　三〇九〇円
エディプスの謎・上―近親相姦回避のメカニズム―　N・ビショッフ／藤代幸一・工藤康弘訳　四四二九円
エディプスの謎・下―近親相姦回避のメカニズム―　N・ビショッフ／井本晌二・川原美江訳　四四二九円
極限に面して―強制収容所考―　T・トドロフ／宇京頼三訳　三六〇五円
自然の社会化―エコロジー的理性批判―　K・エーダー／寿福真美訳　四六三五円
図書館炎上―二つの世界大戦とルーヴァン大学図書館―　W・シヴェルブシュ／福本義憲訳　二四七二円
理性よ、さらば　P・ファイヤアーベント／植木哲也訳　四五三二円
金（かね）と魔術―『ファウスト』と近代経済―　H・C・ビンスヴァンガー／清水健次訳　二二六六円
鯛（たい）〈ものと人間の文化史69〉　鈴木　克美　二九八七円

カフカ家の人々―一族の生活とカフカの作品―
A・ノーシー／石丸昭二訳　二二六六円
理解の鋳型―東西の思想経験―
J・ニーダム／井上英明訳　四九四四円
後期論文集Ⅰ〈ピエール・ベール著作集・第7巻〉
野沢　協　訳・解説　三九一四〇円
騎士の時代―ドイツ中世の王家の興亡―
F・フォン・ラウマー／柳井尚子訳　四九四四円
ホスピスと老人介護の歴史
新村　拓　二一六三円
ある反時代的考察―人間・世界・歴史を見つめて―
K・レーヴィット著／B・ルッツ編／中村・長沼訳　四九四四円
中世の食生活―断食と宴―
A・ヘニッシュ／藤原保明訳　四九四四円
経済環境と労使関係
舟橋　尚道　三九一四円
風景画家レンブラント
E・ラルセン／尾崎彰宏・大谷尚文訳　二二六六円

■放送大学教育振興会
法と手続き
井上治典・三井　誠　二八八〇円

■明星大学出版部
新版　スウェーデン　ハンドブック
スウェーデン社会研究所編　二五〇〇円
マンハイム研究―危機の理論と知識社会学―
秋元律郎・澤井敦　三八〇〇円

■早稲田大学出版部
ヨーロッパ懺悔録〈早稲田選書10〉
工藤直太郎　二四〇〇円
科学哲学25　特集・自然化された認識論
日本科学哲学会編　二〇〇〇円
平和研究第17号　特集・自治体の平和外交
日本平和学会編　二八〇〇円
シリーズ　社会経済史
第1巻　イギリスの海外投資―第一次大戦以前―
P・コトレル／西村閑也訳　一五〇〇円
シリーズ　現代ドイツ文学　全5巻
第4巻　廃墟から―47年グループ短篇集―
H・リヒター他／神崎巌・中野京子編訳　三二〇〇円
水野祐著作集　全10巻
第2巻　日本古代王朝史論各説　上　四五〇〇円
早稲田大学演劇博物館所蔵　芝居絵図録
第2巻　忠臣蔵　上　早稲田大学演劇博物館編　五〇〇〇円
早稲田大学蔵資料影印叢書
第48巻　朱筆書入れ江戸芝居絵本番付集㈢
鳥越文蔵・菊池明・林京平編　一八〇〇〇円
早稲田文学〈第二次〉復刻版　全13巻完結　全巻揃六五〇〇〇〇円
第11巻（大正5年1月号～大正5年12月号）　分売不可
第12巻（大正6年1月号～大正6年12月号）　分売不可
第13巻（大正7年1月号～大正7年12月号・付録）　分売不可

■名古屋大学出版会
現代人の心の健康―ライフ・サイクルの視点から―
田畑治・蔭山英順・小嶋秀夫編　二〇〇〇円
ペトラルカ　カンツォニエーレ―俗事詩片―
F・ペトラルカ／池田　廉訳　一二三六〇円
日本語研究と日本語教育　カッケンブッシュ寛子他編　六六九五円
ヴィーコ入門　P・バーク／岩倉具忠・翔子訳　二七八一円
工業化・組織化・官僚制―近代ドイツの企業と社会―

古典古代とパトロネジ　J・コッカ／加来祥男訳　四一二〇円
現代経済学の生誕　長谷川博隆編　五六六五円
臨床の視点　根井　雅弘　二八八四円
大動脈解離―病理・診断・治療―　祖父江逸郎　二〇六〇円
近世俳諧史の基層―蕉風周辺と雑俳―　阿部稔雄編　九二七〇円
アダム・スミスの知識＝社会哲学―感情の理論を視軸にして―　鈴木　勝忠　一二三六〇円
鈴木　信雄　五六六五円

■京都大学学術出版会

地球環境システム設計論　細江守紀編　三〇九〇円
昆虫採集学（第二版）　川口　勝之　八〇〇〇円
沖縄の集落景観（新装版）　馬場金太郎・平嶋義宏編　六六九五円
現代日本メーカーの生産・物流　坂本　磐雄　七二一〇円
Unzen Volcano: The 1990-1992 Eruption　国狭　武己　三二九六円
救急治療マニュアル（三訂版）　柳　哮・岡田博有・太田一也編　五〇〇〇円
豊かな教養を求めて〈九州産業大学公開講座2〉　福岡救急医学会編　四六三五円
九州産業大学公開講座委員会編　二〇〇〇円
経済学史―課題と展望―　経済学史学会編　三六〇五円
社会のなかの数理―行列とベクトル入門―　I・ブラッドリー&R・L・ミーク／小林淳一・三隅一人訳　三六〇五円

■大阪経済法科大学出版部

創立二〇周年記念論文集発刊部会編
経済学の諸課題　一八五四円
法学の諸課題　一八五四円
綜合科学の諸課題　一八五四円
九一年国際学術シンポジウム報告書編集委員会編
東アジアの社会と経済「第二集」　二五七五円

■関西大学出版部

実在と認識―中観思想研究Ⅱ―　丹治　昭義　五五〇〇円
大阪の笑い　井上　宏　一三〇〇円
サルトルとポスト構造主義　渡辺　幸博　六五〇〇円
女が家を継ぐとき　前田　卓　一三〇〇円

■九州大学出版会

ブロック工法によるPC橋の設計と施工　W・ポドルニー&J・M・ミューラー／九州橋梁・構造工学研究会訳　一五四五〇円
Economic Analysis of Incentive, Market and Organization

▼レストランに行けば、たいていはショーケースがあり、見本が飾ってある。これを眺めて、今日は何にしようかと考えるのも、サラリーマンのささやかな楽しみのひとつだ。見本のないレストランもあるが、こういう店には立派なメニューがある。注文もせかされないから、「プロヴァンス風ってどんな料理の仕方？」と、じっくり確かめることができるというものだ（あまり縁のない世界だが…）。

▼ところが印刷業界では、見本もなければメニューもないという例が珍しくない。取引先の拡大のために、新しい印刷所の営業マンがやって来る。さすがに電算写植の利点を滔々とまくしたてる営業マンは少なくなったものの、あいかわらず見本帖を持ってこない。社長の顔写真や社是・社訓を並べたパンフレットを貰っても、何の役にもたたない。これでは、本日のおすすめ品を押しつける場末の居酒屋の女将みたいなものだ。

▼この業界は写研の文字盤・機械の寡占状態だから、どこにでもある写研の見本帖で十分だと考えているのかも知れないが、それでは困る。写研の文字種をすべて揃えている印刷所はまずないから、写研の見本帖では使いにくいということもあるが、それ以上に、同じ機械であっても、それをどう使うか、どのように使う技術があるのか、それぞれの印刷所に特有の個性的な情報を知りたいのだ。

●製作の現場から

メニューのないレストラン

▼前号で「組版オタク」氏が書いている禁則処理の問題もそのひとつだ。追い出し処理か追い込み処理か、横二段組でぶら下がりは可能か、といった情報が欲しい。ルビは中付か肩付か、漢文の送り仮名は字割りして入れるのか脇付か――。こうした細かい原則があれば、それ以外の組み方をする時以外は指定を省略できる。不都合な原則を変えてもらうにも、最初から原則がなければ、あるいは原則があっても、それを知らされていなければ話にならない。

▼写研の機械を使っている場合でもそうなのだから、自社開発の機械、あるいは多少マイナーな機械を使っている場合には、より親切な見本帖が必要だ。ポイント制であっても、電算写植の場合、活字のポイントにこだわる必要はないこと、アウトラインフォントの拡大文字は、オリジナルの大活字にくらべて細めになることなど、意外なくらい知らない編集者が多いのは、それぞれの機械に合わせたきちんとした見本帖がないからだ。

▼東京の某大手印刷所には立派な見本帖がある。この見本帖には、電算写植二種と活版のそれぞれについて、タイプフェースと個別の解説が載っている。表紙はカラー、ＰＰ貼りだ。この見本帖に基づいてある原稿をレイアウトした。ところが、何とその機械はもう使っていないという。以後、その印刷所を使うのはやめにした。

▼最近、長野のＳ印刷が新しい見本帖を作った。題して「電算写植ガイドブック」。Ａ４判二色刷りの三二頁、中規模の印刷所としてはなかなか立派なものだ。特徴としては、現在この社で使用されている四つのシステムについて、ごく簡単ではあるが解説がつけられていること、フロッピー入力の際の注意事項が記されていること、普通紙出力上の暫定書体と印画紙出力の書体の関係が明示されていること、組版指定書の見本が添付されていることがあげられる。残念なのは、指定がない場合の組み方について、何の記述もないことだ。これは、東京のＨ社の見本帖では一ページを割いている。是非参考にしてほしい。

▼とはいえ、せっかくの見本帖も、一度作ったらそれっきりでは困る。毎年とはいわないまでも、数年に一度は改訂してほしい。また、使用する側が関心をもたなければ何の役にも立たない。メニューをしっかり見て、自分の口にあった料理を注文しよう。

（見本帖グルメ）

ISSN 0913-3305

大学出版部協会加盟出版部一覧

北海道大学図書刊行会	〒060 札幌市北区北9条西8丁目 北大構内 TEL. 011-747-2308 FAX 011-736-8605
聖学院大学出版会	〒362 埼玉県上尾市戸崎1－1 TEL. 048-781-0031 FAX 048-726-2962
慶應通信	〒108 東京都港区三田2－19－30 TEL. 03-3451-3584 FAX 03-3451-3122
産能大学出版部	〒152 東京都目黒区自由が丘2－16－5 自由が丘サンビル TEL. 03-3724-9101 FAX 03-3717-4346
玉川大学出版部	〒194 東京都町田市玉川学園6－1－1 TEL. 0427-28-3213 FAX 0427-28-3218
中央大学出版部	〒192-03 東京都八王子市東中野742－1 TEL. 0426-74-2351 FAX 0426-74-2354
東海大学出版会	〒151 東京都渋谷区富ヶ谷2－28－4 TEL.03-5478-0891 FAX 03-5478-0870
東京大学出版会	〒113 東京都文京区本郷7－3－1 東京大学構内 TEL. 03-3811-8814 FAX 03-3812-6958
東京電機大学出版局	〒101 東京都千代田区神田錦町2－2 TEL. 03-3291-9665 FAX 03-5280-3563
東京農業大学出版会	〒156 東京都世田谷区桜丘1－1－1 TEL. 03-5477-2562 FAX 03-5477-2643
東京理科大学出版会	〒162 東京都新宿区若宮町19 TEL. 03-3235-5692 FAX 03-3235-9632
法政大学出版局	〒162 東京都新宿区市谷田町2－14－1 TEL. 03-5228-6271 FAX 03-5228-6010
放送大学教育振興会	〒105 東京都港区虎ノ門1－14－1 郵政互助会琴平ビル4F TEL. 03-3502-2750 FAX 03-3592-2482
明星大学出版部	〒191 東京都日野市程久保2－1－1 TEL. 0425-91-5115 FAX 0425-93-0192
早稲田大学出版部	〒169 東京都新宿区戸塚町1－103 TEL. 03-3203-1551 FAX 03-3207-0406
名古屋大学出版会	〒464-01 名古屋市千種区不老町1 名古屋大学構内 TEL. 052-781-5027 FAX 052-781-0697
京都大学学術出版会	〒606-01 京都府京都市左京区吉田本町 京都大学構内 TEL. 075-761-6182 FAX 075-761-6182
大阪経済法科大学出版部	〒581 大阪府八尾市楽音寺6－10 TEL. 0729-41-8211 FAX 0729-41-9979
関西大学出版部	〒564 大阪府吹田市山手町3－3－35 TEL. 06-388-1121 FAX 06-389-5162
九州大学出版会	〒812 福岡市東区箱崎7－1－146 九州大学構内 TEL. 092-641-0515 FAX 092-641-0172

大学出版(第16号)'92冬　平成4年12月1日発行　発行者　大学出版部協会
〒113 東京都文京区本郷7丁目3番1号東大構内　東京大学出版会内　電話 03-3812-2111 (内)7954
頒布価格100円(本体97円)〒共